

平和の祭典に思う

校長 松本 雅史

長かった夏休みも終わり、今日から2学期が始まりました。

現在、8月11日に閉幕したオリンピックから引き継いで、パラリンピックの熱戦の様子が、日々私達に勇気と希望を与え続けてくれています。皆さんの一番印象に残っているシーンは何ですか。オリンピック・パラリンピックでは、アスリートの方々からその全力の姿を通して、様々なメッセージを私達は受け取ることができました。「諦めない不屈の負けじ魂」「仲間や自分を信じ抜く心」「支えてくれた全てのものへの感謝の心」「生き抜くことの素晴らしさ」・・・そして、「平和の尊さ」です。

さて、今回のパリオリンピックの開会式の選手の出陣は、セーヌ川を船で下るというユニークなものでした。先頭ギリシャの次の旗は、オリンピックの旗を立てた難民選手団でした。

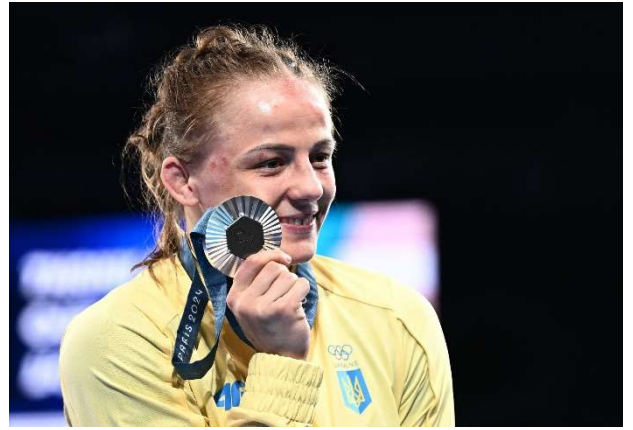


手団でした。難民というのは、主に戦争で住む家や町をなくし、ふるさとの国にもいられなくなって、外国に助けを求めて移り住んでいる人たちのことです。

私達と同じように、学校へ行き、好きな習い事をやらせてもらい、遊んだり勉強したりしていた子どもが、突然の戦争などで町を追われ、ほとんど荷物も持たずに逃げるように国を出る・・・そんな、悲惨な状況になっている人が世界に1億2000万人もいると言われます。これは、過去最大で、日本の全人口に匹敵する人数です。

難民の数は、増え続けています。私たちは、爆弾が落ちてくることもなく、平和に暮らせていますが、地球全体でみると、これまで住んでいたところに住めなくなって、逃げなければいけない人が、どんどん増えているのが実情です。

今回のオリンピックでは、そうした国の一つのウクライナやパレスチナからも選手が参加しました。10日のレスリング女子62キロ級で銀メダルをとったイリーナ・コリャデニコ選手は、戦争が始まり、ふるさとのキーウ



州イルビンから、家族と決死の脱出をはかり、九死に一生を得ました。その後、不安の中、レスリングを続けたといえます。

「どれだけの家が壊され、どれだけ多くの人が亡くなったか。このメダルで少しでも元気づけたい。」

と、試合の後、語りました。

ガザ地区のあるパレスチナからも、8人の選手がオリンピックに参加しました。パラリンピックにも2人の選手が参加しています。では、昨年10月に戦争が始まってから、この戦争で350人もの選



手が亡くなり、ほぼ全てのスポーツ施設が破壊されました。

パレスチナオリンピック委員会のラジューブ会長は、

「選手の参加を通して、ガザで起きている悲劇を世界に伝えることになる」

と話しています。

今回のオリンピックでのこうしたエピソードは、今、世界で何が起こっているのかを「知る」ことの大切さを改めて感じさせてくれます。

私たちは、何のために勉強するのだろうか、考えることもあるだろうと思います。一人一人その理由は違うと思いますが、その理由がその人の行動を決め、その人自身をつくり、その人の未来をつくっていきます。

「自分のために」学ぶのは当然ですが、それだけでは、独りよがりのさみしい未来になってしまうような気がします。「自分のために、そして、みんなのために。更には世界の平和のために」と、広い視野と深い使命感をもって学ぶ時、それぞれの才能の芽は、その人や周囲の想像を超えて限りなく伸びていくと思います。

今朝は、2学期のはじめに当たり、オリンピック・パラリンピックでの難民選手団を通して知った世界の様子について、そして学ぶ意味についてお話しました。